

東京 IPO 特別コラム

2016年8月12日 Vol.40

悲喜こもごもの第1四半期決算で注目のIT企業

株価の変動をもたらす要因となっている四半期決算。中長期スタンスの投資家ならいざ知らず、短期で売買を繰り返す投資家にとっては四半期決算の発表は重要なイベントであり、その内容をいち早く吟味して、有効な売買につなげようとしているように感じられます。そうした株価の変動が一過性になるかどうかはともかく、3月期決算の第1四半期の進捗率が良いのか悪いのかによって株価の明暗が分かれています。

結果はどうであれ、地合いの悪い相場環境下では投資家の多くは単純に前年同期と比べて利益が減少しているとか、進捗率が思ったほど良くなかったといった理由で保有株を一気に売却します。するとこれまでは穏健な推移を見せてきた株価がそれまでとは打って変わったように値下がりをしてしまいます。そうした投資家の皆さんの行動には誤解もあって、よく吟味すれば決して、そこまで売り込まなくても良いだろうと思えるケースも出て参ります。実際に四半期業績内容が悪化して通期も下方修正に至るケースもあるかと思いますが、それはケースバイケース。決算の悪化を感じられるとすぐに売却してしまう投資家がいるというのもうなずけます。基礎建設工事のテノックス(1905)は第1四半期決算を8月5日の13時に発表しましたが、その直後に、700円台から一気に611円まで売られたのも、そうした業績の進捗率悪化や減益決算を評価してのものでした。実際には受注自体は前年同期比25%増と通期想定受注の伸び率17%を超えていて、通期業績見通しも据え置いています。一部投資家の誤解でややまとまった売りが出た結果の株価下落と思われる。

一方ではとても進捗率が高く、通期も上方修正の余地が高いのにそれほど評価しないままとなるケースもあります。電力・ガス自由化対応のシステム開発が好調なアドソル日進(3837・8月10日現在株価1400円)の第1四半期決算の経常利益は進捗率が37.2%に達しており、通期決算も上方修正の余地が高まっており、注目されます。第1四半期発表段階での上方修正には至っていませんが、余裕含みであることは確かなことです。IoT機器向けのサイバーセキュリティシステムも大手メーカー向けなど拡大が予想され、既に来期以降の業績拡大にも期待が高まっています。発表後の株価は比較的堅調な推移となりつつありますが、投資家は引き続き冷静な売買を行っているようです。

四半期決算を読み解く投資家の判断は短期的には間違っている場合もあり、そこがまた意見の異なる投資家にとっては投資チャンスと映るのかも知れません。結果としての投資家が得るリターンはわかりませんが、こうした悲喜こもごもの出来事が銘柄にもよりますがおよそ四半期ごとに起きる可能性がありますので、投資家の皆さんはそれに備えておく必要があります。業種やビジネス内容によって四半期決算の数字の出方は異なりますが、企業側としても普段から中長期スタンスで評価してくれる投資家にアピールしてファンになってもらう必要があります。また、一部の投資家が決算内容を誤解しな

東京 IPO 特別コラム

いような積極的なアピールと投資家への何らかの説明が求められます。つまり普段からの IR 活動による備えが株価の安定化のためには必要だろうと思われま

(東京 IPO コラムニスト 松尾範久)